水戸学者・豊田天功の易占
――近世易占書の批判的実践とその世界観をめぐって――

綱川　歩美

はじめに

近世の易占書や易経をめくっていると、文字や記号が書かれた紙片に遭遇することがある。大概は占いのメモである。この状況は、易書類が占いの道具として用いられていたことを示している。探し物のありかや自他の運勢、商売の行方などを占ったと思われるそれらの紙片は、占者あるいは占いの依頼者の、作法・思考、願望の痕跡である。ある意味、一片に凝縮・集中した理性や感情の遺物であり、生々しい意識・思想の記録とも言える。こうした占いの形跡を読み解けないだろうかというのが本稿の出発点である。しかし、内容や背景を読み解こうにも、メモという性格上、それほどふんだんには情報を提供してはくれず、困難な場合が多いのだが。

ところで、占いを含む近世の易[1]は二つの方向性に分類される。一つは「八卦占」「即時占」など簡便性・実用性を追求していった、占いのための易学[2]である。近世初頭中国・明の卜占書の諺解を多く出版した馬場信武、近世中後期に江戸や京都で名を挙げた、平沢随貞・新井白蛾などの易占書の担い手が有名である。

もう一つの流れは『易経』やその注釈書を重視し哲学的な思索の材料とする、専ら「学問」として扱われる易[3]の存在である。近世前期の闇斎学派などはその類である。

前者の易は占いの技術として象数の側面に、後者は義理（道理）でもって道徳的側面にそれぞれ引きつけて解

釈する立場である。二つとも易がもともと有する性質であるが、それぞれがはっきり分岐していったのが、近世の特徴とされる。

しかしそれは易の技術面と理論面とを分離した俯瞰的な分析であろう。こうした分類を否定するつもりはないが、時代や社会固有の特質を反映した実態を含めて問題とするには不十分さを否めない。そもそも日本近世に限らず、本来的に易の知識体系は、技術と理論の両面を保持しながら存在してきた。複合的な知識体系として、主体の前に存在していたとすれば、技術と理論の線引きはそれほど有効ではなかろう。むしろ両方の要素が一人格に混在するほうが自然である。そこにこそ、易の受容と実践の具体的な様子が現れるはずである。そのように考えるならば、高度な易哲学の領域を問題にする立場からは、失せ物探しや待ち人といった、日常的な願望に解決の導きを与えるような易占のあり方は、どのようななかたちで統一がはかられていたのか。[4]

こうした問いは個人の問題だけでなく、近世的な学問状況を踏まえた受容の問題に照らすことによっても意味を持ってくる。知識の担い手が特定の階層に制限されることなく、併存していた近世社会では、[5]人々が占いや易学の知識・思想に接触する機会・経路は複数用意されていた。先述のような易の性格の違いが互いに認識される機会も存在することになろう。例えば民間では日常的な、生活知として需要のあった辻占のような稼業は、幕府や藩に仕える儒者をしての実践と思考上にどのように位置づけられていたのだろうか。[6]

個人の思想的な問題としても、知識や学問の社会的存在形態の問題からしても、易をめぐる近世期の世界観がどのように形成されていたかが問題になろう。そもそも、これまでこうした問題意識自体にさほど関心が持たれなかった。井上智勝が指摘するように、西洋科学や近代合理主義の前に、「呪術」「迷信」として一蹴されてきたものである。[7]しかしながら、如上の視点から「時代固有の問題や意義を問う」[8]ためには、その世界観に分け入っていく必要があり、その解明には、占いのメモがひとつのヒントを与えてくれそうである。

今回幸運にも、比較的内容量の多いメモに出会うことができた。その素材と方法は、近世後期〜幕末の儒者・豊田天功（とよたてんこう）[9]（文化二〜元治元）の占断メモである。[10]豊田

天功は、名を亮（たすく）、通称を彦次郎といい、天功は号である。常陸の久慈郡坂野上村（現常陸太田市）の庄屋の二男に生まれ、十四才で藤田幽谷の門人となり、十六才でその推薦をうけ、幕末水戸藩の史官員となる。その後江戸への遊学も果たしており、晩年には彰考館総裁となる。

先行研究による天功の評価は、水戸学内の思想的対立、立原翠軒・藤田幽谷両派の争い等で退転した『大日本史』編纂、なかでも志類とよばれる部門史に力を注いだ人物である。また教育史の観点からは、志類編纂の指導的立場とともに、洋学受容を推し進めた人物とされる。本稿では、「儒者」天功を踏まえ、彼のメモに情報を肉付けしていくことで、当該期の社会情勢との関係における彼の易占の意味を考えてみたい。

行論に入る前に、史料の内容を理解するために必要な易占の知識について説明しておきたい。易では卦という図象が基本になる。陰と陽を組み合わせた三本からなる八卦があり、万物の原初形態を表象する。これを二つ重ねて一つのまとまった六十四の卦を形成する。卦を構成する一つ一つを爻といい、爻は下から順に数え、初爻（一爻目）から上爻（六爻目）となる。占い方は様々だが、最初に得られた卦を本卦とし、本卦の爻に陰陽が入れ替わる変爻がある場合は之卦（変卦）を形成する。それを「〇〇（本卦）の△△（之卦）に之く」と表現する。占断のベースになるのは、基本的には『易経』である。『易経』は六十四の卦に付された彖辞と、各爻につけられた爻辞の短い文章から成る本文、十翼伝という解説を含む。これらの文章やそこから発展させた文言・諸々の注釈書などによって、本卦・之卦の内容を判断するのが易占の基本である。

一　易学者対天功

易学者たちの占法

天功は二人の易学者[11]について言及している。一人目は、平沢随貞（一六九七～一七八〇）である。随貞は下野国安蘇郡旗川村（現栃木県佐野市）に生まれ、十代で江戸に出て売卜をして生計を立てる。後に水戸の易学者・小川養軒なる人物に学んだようであるが、宝暦期ごろから易占で一世を風靡する。徂徠学批判でも知られる松宮観

山はその弟子である。[12] もう一人は、新井白蛾（一七一四～一七九二）、名は祐登、字は謙吉、白蛾と号す人物である。江戸の下谷に生まれ、父の命で菅野兼山に師事する。[13] のちに上京して易説を研究し占筮の一流をたて、晩年は加賀藩に仕える。

彼らの生き方に共通して言えるのは、儒学的知識を吸収する出発点、あるいはその知識の行使において多くを民間の社会に接していたことである。これは、藩の学問・教育機関に終生属する天功とは大きく違う点と言えよう。いささか技術的な話で込み入っているが、随貞と白蛾の主張を整理しつつ天功の批判点を以下にみてみよう。

二人の易学者は占断の際の変爻に関わる考察をおこない、それぞれ一家言を成していた。まず二人が共通して主張しているのは、朱子『易学啓蒙』（以下『啓蒙』）の法則を採択しないことである。『啓蒙』の法則とは、本卦から之卦へ移るとき、変爻があれば、その変化した爻辞を、全爻とも変爻のときは彖辞を占断の根拠とするというものである。

例えば白蛾は、「周易先儒伝皆言フ、六爻皆変セサレバ彖ノ辞ヲ以テ占、爻変スレハ其動爻ノ辞ヲ以テ吉凶ヲ決断シテ彖ノ辞ヲ不レ用。今余此説ヲ不レ取。」（『古易精義大成』[14]）という。白蛾は『啓蒙』の変爻処理を行わず、独自の方法をとる。「余カ著述ノ諸篇専ラ吉凶悔吝ヲ解ス、毎レ卦某ノ卦ハ某ノ象ノ意ト云フモノハ余カ一家伝也」（同前）という具合に、六爻変であっても彖辞を用いず、卦ごとに設定した独自の形象と意味でもって吉凶を判断するという。

一方随貞は、変爻三位説というまた独自の方法をとる。

陰陽配合、唯々三位陽ハ進ム故上一爻ヲ兼、初陽動ク時ハ二陰不動シテ副フレ之ニ。三陽動ク時ハ、則四陰不動副フレ之ニ、五陽動時ハ、則上陰不シテ動、副フレ之ニ。其変ル所只三位ノミ。コレヲ人ノ両足歩行スルニタトフ。左足動時ハ右足静ニ、右足動ク時ハ左足静ル。若両足倶ニ動ク時は、顛倒セズト云事ナシ。

（『卜筮経験』[15]）

難解であるが、要は奇数爻が陽で変爻の場合、すぐ上の偶数爻は変化しないということになる。隣り合う二爻（奇数爻と偶数爻）は同時に変化しない。六つの爻を二

爻づつ組み合わせで考えるので、結果的に変爻は最大でも三つまでということになる。

これには、「陰陽配合」とあり、限定される変爻を人の歩行にたとえるように、陰と陽が調和するという観念が基底にある。松宮観山が編んだこの隋貞の語録、『卜筮経験』には、「是地ノ生スル処天ト合シテ其功ヲ成ス也。…二爻ヲ合シテ変ヲ命ス。陰陽ノ合シテ其功ヲ成スノ至理ニ合スル事、益明カ也」とある。物事が変化する場を陰陽の交錯点によって捉え、それを変爻という機会にも当てはめている。随貞は陰陽が調和する固定的な一点に、物事の結果を見いだそうとするようである。

天功の反論

これらに対して天功は、次のように反論する。まず白蛾に対しては「祐登カ説拠トスルニタラズ」と述べる。すなわち白蛾が『啓蒙』の原則を否定するために、六十四卦の形象に対して独自の解釈を付与することを、ひとりよがりな説と一蹴に伏している。白蛾の説についてはこれ以上踏み込んでいない。

一方、随貞の変爻三位説に対しては、丁寧な反論を展開している。まず、『春秋左氏伝』『国語』『史記』中国の各時代の歴史書などから、占いの記事を抽出して占断の方法を分析している（【表一】）。

例えば、『春秋左氏伝』「閔公元年」の記事で晋の献公に仕え、軍功をなした畢万が、かつて自分の成功を企図して晋に仕えるか否かを占ったものがある。このときの結果は、「屯の比に之くに遇う」で、本卦は「屯」（䷂）で之卦は「比」（䷇）である。「屯」の初爻が陽から陰へ変化して「比」になったものであることが分かる。

他にも天功は、いくつかの事例を歴史書から抜き出して分類をしている。【表一】のうち①②③⑦は、変爻した爻辞を以て占断した例と、⑤⑥⑧⑨の必ずしも爻辞が占断の根拠でない例である。前者は『啓蒙』の方法による占断としているが、後者はそれ以外のものと判断している。例えば、⑤の場合「コレ等ハ泰ノ臨ニ之ク爻辞ヲバトラズ、泰ノ象辞ヲ以大来ルト云ニヨリテ活断スル者最当レリ」（高五-五）というように、「泰」（䷊）から「臨」（䷒）への変転は、第三爻のみの変爻であるが、占断の根拠となったのは、爻辞ではなく彖辞である。⑥の「艮」

（䷚）から「隋」（䷐）への変卦は、二爻以外すべて変化しているし、占断の根拠も爻辞ではない。

後者の事例は、『啓蒙』の変爻の爻辞を基準にするというものではない。また隋貞の変爻を三位までに限るという法則にも該当するものではない。天功は、歴史上の事例を根拠にして、変化した爻に限定して占断するのではないと指摘しているのである。そして随貞の説にはさらに言葉をついでいく。

変爻三位ニ限ルノ説其一家ノ妙トハ云ヘシ、往古ニ其例ナク前人ニナシ、自前聖ノ未発ヲ発スト云トイヘ共、易ノ変化無窮ノ真理ニ叶ハズ、「生々不息」ニ非ズ、一家ノ刱説ニシテ聖道ノ大全ニアラザル（高五-一一）

占法ニ一定ノ例ナク必シモ爻辞ニ拘ハルベカラズ爻辞■（二十九）拘ハル者ノヨク易ノ神妙ヲ　尽スニタラザル事ヲ。（高五-五）

占考の根拠	爻辞=○ その他=△	史料番号
「屯」の第一爻の爻辞	○	高5－5
「乾」の二爻の爻辞	○	
「比」の五爻の爻辞	○	
不詳		
「泰」の彖辞	△	
「随」の彖辞	△	
「観」の四爻の爻辞	○	高5－11
「屯」「豫」の彖辞と上下卦辞	△	
	△	
「泰」の彖伝と占星	△	
不詳		

変爻のパターンに限定を加える方法は、陰から陽、陽から陰へと止むことなく変化し続ける様子を、遮る印象がつきまとう。随貞流は陰陽の交錯点を措定することで、流れの停止する一点を生じてしまうのである。万物を生じ変化を続ける「生々不息」と表現されるような、間断なき活物世界[16]を感得してこそ、「易ノ神妙」（あらゆる事態に対応する利点と決断するための教示）に到達するはずである。実践の次元でいえば、難解な『易経』の文言から、自らの意思で啓示に臨むという態度がここにはあるのだろう[17]。この点はさらに、次のような随貞の考え方と比較してみるとその違いがはっきりする。

【表1】

	占筮	本卦		之卦	場面	引用
①	屯の比に之くに遇う	䷂	→	䷇	晋の献公に仕え軍功をなした畢万が、かつて晋に仕えるか否かを占ったこと。	『左氏伝』「閔公」元年/『史記』「晋世家第九」
②	乾の同人に之くに遇う	䷀	→	䷌	魏の献子に、蔡墨がかつて龍が存在した根拠として『周易』の「坤」の辞をあげる。	『左氏伝』「昭公」二十九年
③	坤の比に之くを得る	䷁	→	䷇	後漢の順帝(劉保)の後宮に入ったとき、その行く末を占う。	『後漢書』第十下「順烈梁皇后」
④	明夷■に之くに遇う	䷣	→ ?		北魏の(孝)武帝の筮。	不詳
⑤	泰の臨に之くに遇う	䷊	→	䷒	前秦の符健が赤水を攻める際に首尾を占ったこと。	『晋書』百十二巻「符健」
⑥	艮の八に之くに遇う(艮の随に之く*1)	䷳	→	䷌	魯の宣公婦人の穆姜が、政争に敗れたのち幽閉される東宮へ入るときに、その吉凶を占う。	『左氏伝』「襄公」九年/『列女伝』「魯宣繆姜」
⑦	観の否に之くに遇う	䷓	→	䷋	陳の厲公が息子・完が生まれたとき、その行く末を周の太史(史官)に占わせた。	『史記』「田敬仲完世家　第十六」
⑧	貞屯悔豫に逢う(屯の晋に之き、豫の泰に之く*2)	䷂ ䷏	→ →	䷇ ䷊	亡命中の重耳が終に帰国するとき、その後の運命の吉凶を占う。	『国語』「晋語　四」
⑨	泰の八を得たり(泰の訟に之く*1)	䷊	→	䷅	帰国した重耳を迎えて董因が、重耳の晋国統治を占う。	『国語』「晋語　四」
⑩	乾の坤に逢う	䷀	→	䷁	王廷湊が筮する。	不詳

*1/第二爻を残してすべて陰陽が入れ替わるのを「八に之く」という。

*2/この解釈は天功に従った。『国語』(新訳漢文大系)の注釈では、『周易』以前の「連山」「帰蔵」の易によるものと推測している。二つの易の詳細は不明。

曰、陰陽ハ是天之道聖人ノ立ル所也。夫聖人立二天地之道ヲ一、蓋シ人ノ天地有事レ道ヲ知テ順受弗ル事レ違ヲ欲スルノミ。豈天地ノタメニ立ンレ之ヲヤ。故周宮ニ曰、茲レ惟三公論レ道ヲ経シテレ邦ヲ、燮二理スト陰陽ヲ一見ツヘシ。礼楽刑政及ヒ日用庶績モ亦是調二和スル陰陽ヲ一之道ナル事ヲ。聖人豈無用ノ道ヲ立テ以テ人ニ示ス事ヲナサンヤ。夫子易ヲ翫テ韋編三断ニ至ル所レ言ノ如キハ是聖人所レ立ノ者ヲ蔑視スル事甚シ。吾儕唯聖人ヲ尊信スルノミ。(『卜筮経験』)

「天之道」である『易経』は、聖人の言として始めから尊崇の対象である。孔子のように人知によって理解しようと、「韋編三断」するほど考えたのは、「天之道」の侮蔑にほかならいという。ここには易経のもつ形而上性に言及し、自ら追求していく態度はみられない。最も、天功が易に表現されるような神秘的な世界を解することができるというのに対して、随貞はそうした形而上の世界を人知の及ばない範囲とする立場の違いがあるように思う。[18]

このように随貞と違って天功においては、易の世界観

である活物的世界を自ら解釈する立場が強く主張される。そのため、『啓蒙』も含め判断の型をはめようとする、あるいは技術的な所作によって一種の型を作る随貞流を否定しているのである。

占考根拠	史料番号
困の初爻の象伝	高5－1
震・復の八卦から方位を、復の象伝を引き、西南を捜せば出る	高5－2
蹇の彖辞から東北の水辺にあると指示	高5－3/高5－4
震の第二爻辞から、高い場所にいる、七日もすれば出てくる	高5－6
需の第二・第三の爻辞から、はじめのうちの中傷は大事ないが、自ら敵を招き窮地に陥る、慎むべき	高5－7
漸・艮の象伝から、実りの善し悪しにむらがあるが大凶作ではない	高5－8
睽の彖伝から、陰陽が和合せず大凶年	高5－9
明夷の彖伝と既済の象伝から大塩の敗北をよみ明夷の下卦（☲離は火）から焼死を連想する	高5－10

二　天功の占断と水戸藩

天功の占断

では実際のところ天功自身はどのように占いを行っていたのだろうか。【表二】は、天保年間に天功が自ら占断した内容を一覧にしたものである。占い方は、「銭ヲ以テ卦ヲ作ル」（高五-二の傍注）というように銭で卦をたてたこともあるようだが基本は筮竹を操る蓍策である。【表二】の④について内容みてみよう。

走人
乙未ノ冬
一人来リ請フテ曰、吾母静ノ神祠ニ詣ツトテ出テ久シク帰ラズ、其蹤跡ヲシラズ、捜カシ索ムルニ得ル事ナシ、人甚患フト云、或ハ狐狸ノ為ニ魅セラレシ者カ、人甚患フト云為ニコレヲ筮ス、震ノ帰妹ニ之クニ遇ヘリ、断ジテ曰、「震来厲、億喪貝、躋于九陵、勿逐、七日得」トイヘリ。

【表2】

	日付	表題	状況	占筮結果	本	→	之
①	年月日未詳	遺失	或人が賊に物を盗まれる	(習坎)→困	䷜	→	䷮
②	年月日未詳	失物	或人が刀を奪われる	震→復	䷲	→	䷗
③	年月日未詳	(遺失)	或人が刀をなくす	蹇→復	䷦	→	䷗
④	天保6・冬	走人	或人の母が行方不明に	震→帰妹	䷲	→	䷵
⑤	天保8・2・4	営功利	或人が「北方」で商売をするにあたって	需→屯	䷄	→	䷂
⑥	天保9・6	豊凶	今年の収穫状況	漸→艮	䷴	→	䷳
⑦	天保7・6・6	(豊凶)	今年の収穫状況	睽→損	䷥	→	䷨
⑧	天保8・3・16	料敵	大塩平八郎の存否	明夷→既済	䷣	→	䷾

震ハ震動ナリ、大ニ騒キ心労シテ捜カシ索ムルノ象ナリ、喪貝ハ明ラカニ母ノ見ヘザルニ的当セリ、躋于九陵トイヘバ高キ所ニ匿レ居タル者ナラン、山ニ付キ岡ニ付キ地勢高キ所ナルベシ、勿逐七日得トイヘバ捜シ尋ルニモ及ブベカラズ、七日メマデニハ自然出テ来リタルベシ、サレト母ノ事ナレバ、随分捜シ索メヨ、狐狸ノ為ニ魅セラルヽカ若キハ、決シテ其患アル事ナシト云、其後金大鼓ヲ鳴ラシ処々捜索シメシニ、是震ノ象、筮セシヨリ五日メマテニ、高倉ト云処ヨリシテ自然ト帰リ来リ、其名前後一々的当セリト云。(高五-六)

天保六年の冬、ある人が参詣に出た母が帰らないことを心配して捜索したが見つからない。そこで天功に行方を占ってもらっている。すると本卦が「震」(䷲)で之卦が「帰妹」(䷵)であった。天功は、「震」の全体の象意と、第二爻(「震の来たるとき厲(あやう)し。億(はか)りて貝(ばい)を喪い、九陵に躋(のぼ)る。逐うなかれ。七日にして得ん」[19])から占断を下す。すなわち、「震」はそもそも「震動」の意味を持つとして、人々が大勢声をあげて、行方不明者を捜索する様子に当てはめる。そして第二爻から「喪貝」は行方不明の母を意味し、「九陵」のような高い所にひっそりといるはずであるという。また、七日もすれば出てく

るであろうが、母（おそらく老女だろう）であるから該当する場所を中心に大々的に探した方がよいと助言している。結果、その通り「高倉」というところから見つかったというものである。もう一つ紹介しておこう。

丙申ノ夏六月六日土曜入テ天気ヨカラズ冷秋ノ如シ、高階生来リ談ジ、当年ノ或ハ凶饑ナラン事ヲ患フト云、試ニコレヲシテ筮セジム、火澤睽ノ山澤損ニ之クニ遇ヘリ、断シテ曰、「睽ハ火ガ睽ヒテ上ニ昇リ、澤ハ睽ヒテ下ニ帰ス、二女同居シテ其志相得ズトイヘリ」。火澤相睽ク陰陽ノ気相交ラザル象ナリ、陰陽交ハリテ天地ノ気和ス天地ノ気和シテ五穀生ズル事ヲ得ベシ、是其火澤相睽陰陽ノ気交ラザル甚シキ凶年ノ姿ナリ、殊ニ損ハ減ナリ、五穀損減大小トナリ、多ハ少トナル、凶年ノ■ナシ、サレド火澤相睽クトイヘ共、陰陽ノ気未タ全ク竭キズ、尽生類ノ尽ルニイタルベカラズ、吾ト子ノ若安穏ナル事ヲ得ベシト云。後果シテ言ノ如ク大凶年ナリ、高階其奇中ナルヲ感ズ。（高五-九）

こちらは、天候不順だった天保七年の夏、今年の作柄をうらなったものである。結果は本卦が「睽」（䷥）で之卦が「損」（䷨）であった。「断シテ曰」以下の文章は「睽」の彖辞である。彖辞では、上下の卦が相容れない様子を、一家に二人の女が同居するというイメージでもって描く。天功はここから、「陰陽ノ気」が交わらない、「天地ノ気」が和すことがないので五穀の実りがないと判断する。陰陽の気が交錯し合い、絶え間なく活発に働くことによって、物事が展開（ここでは作物の実り）していくはずである。しかしそうした働きが滞っている状況からは、万物の生成が達成されることはないのである。天功は今後起こりうる状況を、「天地ノ気」という一種の自然現象に起因させているのをみることができる。

以上のように遺失物探索・商売の成否など個別的に依頼された一般的な占筮が見られる一方、その年の収穫高を予測する豊凶占いなど、時勢を意識したものも含まれている。加えて中でも時事性の高いのは同時代的に起こっていた出来事、大塩の乱を占断である（後述）。

上記にみたように占断は、本卦から之卦へと変爻した部分の爻辞を撰んで判断している様子は見られず、『易経』[20]

の文言を基調に、本卦・之卦から総合的に解釈を加えている印象である。こうした態度は、はじめに述べた近世前期から一般的な易占書が得意としてきた、「即時占」とは一線を画すものである。特に時事的で一回性の要素が強い、社会・政治的トピックの占いは、一定の反復・汎用性の期待できる個別的願望のように一定の型におさまらないからである。やはりこの時代と、そこを生きた天功に帰着する問題として、時勢占いを特徴とすべきであろう。次に当時の天功が置かれていた境遇や水戸藩を中心とする時代状況を見ていくことで、行われた占いの背景を考えてみたい。

天保期の水戸と天功

飢饉と動揺[21]

文政一二（一八二九）年一〇月に水戸藩主となった徳川斉昭（寛政一二～万延元年）は、天保四（一八三三）年、藩政の刷新をはかるべく、襲封後はじめて水戸へ入る。その天保四年は、冷夏と八月一日から二日にかけての暴風雨による影響を大きく被り飢年となった。八月一四日には、水戸藩領隣接地域、棚倉領平潟での藩米略奪が起こる。また十月六日には附家老中山備前守の領地で苛政を訴え騒動（大津騒動）も勃発している。藩領外の奥州筋からも飢民が流入するという事態であった。

これをうけて、藩は民心鎮撫策として米の「散らし売り」（自由売買）を認めるなど、動揺を抑えようと努力する。しかし、翌天保五年、江戸の大火によってさらなる難民の流入をうけ、治安は悪化の傾向をたどる。そしてついに天保七年の全国的飢饉を迎えることになる。

水戸藩領で最も被害が大きかった地域は、久慈・多賀など北部山村と南部の潮来・延方方面であった。飢饉をうけて荒廃した領内は盗人・出奔人の増加など、著しい世上不安に覆われていた[22]。そうしたなか、追い打ちをかけるように、年が明けた天保八年、米穀の底をつく頃、二月一九日に起こった大塩の乱の情報がもたらされる[23]。

一般に言われるように、幕府政治が揺らいでいくなか、体制の内部からおこった騒乱は、大きな衝撃であった。それは水戸藩においても例外ではなく、大塩の乱は重大な関心事であった。むしろ他藩よりもその動向に敏感にならざるを得なかった事情がある。

藤田東湖の『浪華騒擾記事』[24]では斉昭宛の大塩書翰が問題視されている。本書は、韮山代官・江川英龍が内偵をつかって、乱の鎮静にあたった玉造口御手先与力・本多為介へ質した聞き書きである。乱後、大塩から斉昭宛の書翰が江川代官所領内で発見されるという噂があり[25]、水戸藩では江川を介してその情報収集にあたっている。

また乱の情報に反応したのは、藩の中枢部だけではない。豪商関沢家[26]へも次のような情報が伝わっている。

一、大坂表之騒動之儀、未夕実正者相知れ不申候得共、風聞ニ者、右大塩平八郎と申者、むほん人之由、大坂御城を乗取可申由、むほん人の内より返忠之者有之、御城代へ訴申候所、御城方御人数不足故、御評定ひま□候所、大塩方より御城へかん者ヲ入置候故に候、大塩方へ右之者内通致し候故、右大塩むほん相あらわれ候而者不得止事ヲ此方より仕懸ケ城乗取不申候ハヾ、町家へ火ヲ懸其のまきれニ舟ニ乗何方へ行候可相知れ不申様辻守相談取極申候由、尤公儀御米舟御船跡未不相知与申候由、外ニ殿様御舟御米ヲ入其上武具弓鑓鉄炮ヲ入置申候由、其舟ハ川瀬様（水戸藩京都留守居・川瀬教忠―引用者注）御買入之米舟之由、右大塩与御懇意之由、たまされ候哉、何れ不文故実正之儀者追日申上候、此書面御読之上火中可被下成候、極内之故他見無用ニ御座候、外人名ニ御座候ハヾ、殿様迄御手入ニ相成候、徒之風聞ニ御座候、先右申上度如此御座候。頓首。

三月十四日（後欠）

こちらは、大塩が武器を隠していた船が、水戸藩の米船であったこと、藩の関係者が関与したと疑われるような風聞を伝えている。また史料からは乱後の情報がきわめて関心の高いものであったことも伺える。関沢家へ情報を寄せた人物は、「極内」のことと断り、他見無用、読了後の破棄を依頼している。しかしこの史料が残っているということは、日付のあとの差出人と宛先部分は意図的に切り取り、憚りながらも情報を残そうとしていた様子が伺える。

いずれにしても、藩の中枢部に限らず、地域社会へ事件の詳細な顛末が伝わっており、かつその情報への注目

はきわめて高かったことが理解できよう。

天保期の天功と占断

その頃の天功はどのような状況にあったであろうか。文政三（一八二〇）年、藤田幽谷の推薦で彰考館へ登って以来、二度にわたり史館員を離職している。一度目の文政一一（一八二八）年は病気により、二度目の天保四（一八三三）年は小普請組[27]へ編成されている。天保四年の際の原因は舌禍にあったようだが、残念ながらその内容は不明である。

二度目の離職から、天保一二（一八四一）年、弘道館勤めに復帰するまでの間は、閑職であった。復帰の契機は、斉昭の北部視察に同行した藤田東湖が実家の村にいた天功を発見、推挙したというものである[28]。天功の実家は常陸国の北部に位置する久慈郡であり、先述のように飢饉の惨禍が最も深刻な地域であった。

そして天功の多くの占断は、ほぼこの時期に該当する。このような背景を考えると、天功の易占は社会不安が増大するなかで、その直面する事態に判断を示すという意味を持っているのではないか。あらためて大塩の行方を占った占断文を詳しく見てみよう。

料敵

丁酉ノ春二月十九日大塩平八郎大坂ニ叛シ市中ヲ放火シ官兵ト戦ヒ敗レテ其蹤跡ヲヒソメ其行方ヲシラズ、一時都鄙ノ人情暁然トシテ謂、平八郎異国ニ渡海セシ者ナリ、彼其才ヲ以不軌ヲ図ル、後来イカナル変ヲ生ゼンモ測ルベカラズト云。吾試コレヲ筮スル。時ニ三月十六日也、元来吾在所僻遠ノ地故、三月ノ初ツカタ始メテ此変故ノ声問ヲ聞シナリ。明夷ノ既済ニ之ニ遇ヘリ、断ジテ曰、平八郎敗ブルヽ近ニアリ、或ハ既敗ブレ死ニ就キシ者ナルベシ、明夷ハ敗ナリ、既済ハ既ニ済ルナリ、夷ノ既ニ済ル豈長カル事ヲ得ベケンヤ。

後、素（大塩の号―引用者注）捕ハレテ刑セラルヽカ蹤跡窮マリ自滅シテ死スルカ、此二ツノ内ヲ出ベカラズ。想ニ既其蹤跡見ハレ不レ遠夷滅ニ就クナラン、或ハ既刑戮ニ就入シモシルヘカラズ。言ノ験シアルト否トハ、後来ヲ待テ見ルベシト云。果シテ是月廿七日後素大坂油掛町ニ匿レ居タル露ハレテ既官兵向

ヒ捕フルニ及ンテ後寄家ニ火ヲ懸ケ家中ニ飛入自滅シテ死ス、人皆吾言ノ験シアルヲ嘆ズ。

尚按明夷ハ火ナリ、焔硝ヘ火ヲ懸ケタル姿尚以分明ナリト云ベシ、卦象中ニ宛然タリト云ベシ。後素カ死スル、兼テ焔硝ヲ積ミ、危意ニ臨ミ火ヲ懸ケ火中ニ飛入自滅セシト云、按スルニ明夷ハ地火ナリ、焔硝ノ象アリ、焔硝中ニ火ヲ懸ケタル姿卦象中ニ宛然タル者ニアラズヤ。（高五-一〇）

天功のもとへ大塩の一件と、乱後行方の分からなくなっていた当人のことが伝わったのは、半月ほど後の三月初めであった。「一時都鄙ノ人情暁然トシテ」とあるように、巷間は騒然となり、海外逃亡説や報復説など大塩の行方をめぐって憶測が飛び交っていた。そうした状況のなか、天功は三月一六日、「吾試コレヲ筮スル」と、人々が注視する事件の顛末を予測している。

結果、「明夷」（䷣）と「既済」（䷾）であった。天功はここから、「不」遠夷滅ニ就クナラン、或ハ既刑戮ニ就入シ」と、捕らわれて処罰されるにしても自滅するにしても、敗れるのは遠くない、あるいは既に死んでいる可能性も示唆している。

天功の予断はそれぞれの卦から導かれたものである。「明夷」には明るいもの、エネルギーのあるものが、地中へ押し込められるイメージが付随するし、「既済」は物事が秩序だった状態を示す[29]。天功は、占断の結果に大塩が鎮圧され、乱以前の社会情勢への復帰を読み込んでいるのである。

うがった見方をすれば、先の水戸藩領域での事件に関する関心の高さを感じていたはずの天功が、占断結果を都合よく解釈したともいえなくない。政治的な意図をくみ取ることも可能かもしれない。というのも、占断の表題「料敵」からも分かるように、大塩は始めから「敵」であり「夷」と規定されているからである。しかし注意すべきは、天功にとってこうした結末が望ましいものであり、かつ当然そうなるべき（つまりは的中するはずの）結果であった可能性である。

人心動揺のおり、幕藩体制の反乱者に関する動向は、決して歓迎されるものではない。その意味で卦が示す大塩の敗北予測は、事態を収拾するのにたしかに都合のよい内容である。しかし、単に合目的々にのみ占断が操作

されたとするのも不十分である。なぜならば予想が的中したことを「卦象中ニ宛然タリト」と是認する態度や、そもそも事件を占うという行為自体が、天功の中で「合理性」を保った思考であるからである。ここに天功とその時代の「合理性」概念がある。[30] その「合理性」の根拠には、「生々不息」、気の間断なき活物的世界を構成している秩序が透けている。易占はその秩序ゆえに現実社会における結果を担保されているのである。大塩平八郎はこうした天の秩序からすれば、撹乱要因として措定されているのであろう。

三　著作にみる世界観

天功の秩序観とそれに基づく現実認識、特に天の秩序と人の関わりが現実社会に及ぼす影響についてどのように考えていたのだろうか。天功の同時期の主張から抽出してみたい。占断と前後する時期に執筆したものとしては『常州義軍考』と『中興新書』がある。

天保八年三月に書かれたのは『常州義軍考』[31]である。跋文の日付は三月一二日、実に大塩の乱を占う四日前に書き上げたことになる。

本書の執筆動機は、「二三友相議して文作りて数子の逸事を掲け碑を建て永世にならんことをはかる」とあり、数人と議論して歴史上の人々の碑文顕彰をすることであった。ここで天功らが取り上げようとしているのは、南北朝期の南朝方へ加勢した郷土の武将たちである。彼らを掘り起こし、碑石を作り後世へ伝えようとしている。[32]

常陸国久慈、那珂郡一帯は、関東における南北朝争乱の舞台となった場所である。建武三（一三三六）年の瓜連城の合戦は、南朝方の楠正家が足利勢の佐竹氏と攻防を重ね、敗れた戦である。この正家方へ従ったのが、那珂通辰、大塚真義・貞成などで、彼らの事跡をまとめたものが本書である。[33] 編纂に際して、『職原抄』『神皇正統記』『太平記』『関城書』などの古記録や、『常陸国誌』『藩翰譜』の近世の編纂物、また地域に残されていた古文書（古内清音寺文書、伊賀式部三郎文書、佐竹系図）などから多くの記事を参考にしている。そのなかで、名跡が今に伝わらない彼らについて次のように述べた箇所がある。

其義に伏し命を軽ぜしかと姓名湮晦磨滅して聞ゆる

事なと、後世に展る事を得ざる者亦其数をしらざるべし。かく当時天下の士（欠字）王室に心する者の多きを以推考ふるに（欠字）皇運の開くると開けざるとハ唯天命の向背をそ争ひたる。天命の向背ハ、人心の去就によりて定るなれバ、天人の際最畏るべき事にぞ有ける。

「姓名湮晦磨滅して」後世ではその名前も伝わらず、一族の繁栄もないが、郷里には南朝につくした多くの「義臣」たちが存在した。彼らの尽力にもかかわらず、南朝方が敗れたのは「天命の向背」が味方しなかったためである。「天命」を左右するのは「人心の去就」である。そして天命と人心の交錯する「天人の際」こそ畏怖すべき場として示されている。

天命と人心の関係についてはこれより少し前、天保三年六月の『中興新書』[34]でも言及している。本書は藩主斉昭へ藩政の状況を報告し、人材登用・修史事業・学派の異同などについての改善を上呈し、藩主の水戸就着を前に改革政治の実現にむけての確固たる心組みを要請したものである。

扨当今ノ勢、実ニ尋常容易ノ事ニテ中々天心ノ回ルト申スコトコレナク、明ラカニ天命ニ勝了ルノ所存ニナク候テハ、大業ノ本立不申故、ヨク〳〵御任当ナサレ候様ニト、乍恐愚見申上候。扨何事も〳〵天命人心ノ出合候所ヨリ事ノ成否アラハレ候コトニテ一々其理アリ、不偶然事ニ候。第一当今上公新ニ大統ヲ纂ガセラレ、文武ノ御徳明ラカニシテ、政道ヲ一変セラレ、中興ノキザシアラワレ候コト、天命人心ノ所在、実ニ深理アルコトニ候　（『中興新書』）

天功は、書名が表すように、現藩主・斉昭の治世に二代目藩主・光圀以来の「中興」を期待している。ちなみに先の南北朝期の那珂氏・大塚氏らの行動も「中興」への義挙とされていた。その「中興」のためには「天命ニ勝了ル」ようなつもりでなければならないとする。そして「天命人心ノ出合候所」にこそ事業の成否が明らかに現れ、それは偶然の産物ではないという。天命と人心の関係は、天功自身が生きている時代の現実的課題でもあることが分かる。

ところで、藤田幽谷の高弟で後期水戸学を牽引し、天保期の改革政治にも関与した会沢正志斎（天明二～文久三年）も、「天」の概念について語っている。正志斎の思想の根拠、人々の行為の前提となっているのは、自然かつ普遍の「道」である。正志斎の場合自然であるところの「天地」（「天」）は、「人と物を生み、育てそしてあるべき道を指し示す、人と物の世界を大きく包みこんだ道徳的有機体」である。[35] こうした天地の活物観は、西洋の脅威を宗教による民心掌握の手段としてイデオロギーの次元で捉えさせた。そして、それに対抗すべく民心統合の足がかりに祭祀論を、さらには国家的宗教を構想させたという。[36]

正志斎は 文政八年に代表作『新論』を執筆し、その翌年には幽谷に代わり彰考館の代表を務め、そのまま天保二年には総裁に就任する。その知名度はすでに藩内に限定されるものではない。同門の天功がここに影響を受けることは十分にあり得る。[37]

そして天功の場合、天と人心の関係を具体的に発揮するのは、人材登用の文脈である。

サスレバ今日、当世ノ通病ヲ熟慮仕候ニ、上下否塞シテ下情不上通、是第一ノ病患ト奉存候。然ラバイヨ〳〵賢才ヲ下ヨリ挙ゲテ、明良心ヲ合セ大業ノ根本ヲ立、天運人心ニ承当スルニ非ズバ、今日ノ中興ハ不可成候。是処基本一タビ立候ヘバ、衆才群能官職尽其宜ニアタリ候故、政事皆其当ヲ得、民心悦復シ天運再回リ、中興ノ大業コレヨリシテ立可申候。（同前）

民情の不通が藩政を膠着させているのであり、「賢才」の登用によって君主・家臣が一体となって事に臨むことを打開の方法としている。人材の活用によって的を射た政治を行い、「人心」「民心」の支持を回復するところに「天運」（天命）が伴うという。天命と人心の去就をめぐる結果は、過去の政局、歴史を決定づけてきた要因であった。それはまた同時代に適用されるはずの課題でもある。藩政の「中興」を強く希求する天功にとって、人心の動向は熟慮すべき重大な問題であった。そして通時代的に語られる「人心」と「天運」の関係性を普遍的な、「天」の秩序、その観念の外皮に覆われた世界が、天功の属す

る世界であり社会である。

おわりにかえて

改めて天功にとっての占いの意味を考えてみよう。天功は、占断メモの末尾で「其名前後一々的当セリト云」（高五-六）「後果シテ言ノ若クナリキ（高五-七）「其後果シテ言ノ若ク是歳饑スレトサマデノ害ナカリシ」（高五-八）というように、占断は、現実をよく反映している。砕いて言えば〝当たる〟のである。この状況を占断に向かう態度から鑑みれば、活物的世界の変化の諸相から的確な占断を読み取ることに成功したことになる。

一方で、天命人心相まって変革の時勢において、豊凶や騒動を占うという行為は、そうした衝撃を緩衝する意味（社会的効果）を含んでいたはずである。はじめから「料敵」という占題で大塩を比定する点や、会沢以来の「民心統合」の意図を持っていたということなどを考えると、占いにもそうした社会的機能・効果を期待していたはずである。

上記の二つの側面は決して矛盾しない。天功が理念的に想起する世界観と、現実の世界は親和的に連続しているからである。中国や日本の歴史書の記事が伝えるように、活物的世界の内部で、天運と人心との間で繰り広げられた運命ゲームが、通時代的に存在しているということがその証明である。いわば歴史的な時間軸のなかで培われ正当化された世界観を保持しているといえる。

最後に天功のその後の様子を述べながら、発展的課題を挙げておきたい。

天保一二（一八四一）年五月、天功は藩校弘道館勤務、次いで史館編修兼務となる。翌年からは志表編修に専念するも、弘化元（一八四四）年、斉昭の雪冤運動の罪科を問われ逼塞を受けたのち、嘉永六年に復職している。以後、斉昭の命をうけ時局の必要に応じて外国事情の編纂に着手しはじめる。このころから、独学で蘭書翻訳に取り組んでいく。天功はここにきて西洋知識に接近、積極的に摂取していく。その際、伝統的な儒学知やその根底の歴史的時間軸による世界観に規定された易占は、彼の思考上どのような変化をもたらすのだろうか。これはおそらく西洋知識によって地理的あるいは空間的世界への認識を新たにしていく、近世から近代への過渡期の、

知識人層が迫られた思考上の問題の一つとして今後の課題としたい。

【注】

(1) もちろん易学は前時代からの継承の上に成り立っている。足利学校では、『易経』が主要なテキストであったがそれは、「易理」と「占筮術」との両方を含んでおり両者が分岐するのが近世的特質の一つでもある。（源了圓『近世初期実学思想の研究』創文社、一九八〇年、一四七頁。和島芳男『日本宋学史の研究』吉川弘文館、増補版一九八八年。小和田哲男『呪術と占星の戦国史』新潮選書、一九九八年）。

(2) 仏教的要素を取り込んで「八卦」を解釈するものや、卦ごとに特定の問題（射覆・待人・失物・願望・天気・売買）の成否を載せすぐに占いの結果を知ることが出来るもの。易占書の詳細については益子勝「易占書について―江戸時代の即時占いを中心に―」（三浦國雄氏『術数書の基礎的文献学的研究―主要術数文献解題―』平成一七年度～一八年度科学研究費補助金（基盤研究（c）研究成果報告書）。おみくじなど民間の占いの形態については、大野出『江戸の占い』（河出書房、二〇〇四年）などや、大雑書研究もより広い民衆の心性に照準をあわせている。

(3) 「四書五経」を学習の機軸とする朱子学をはじめ、天人観や生成論など思想的タームを読み解くための基本的テキストとしての取り上げられてきた。

(4) 荻生徂徠の「易・卜筮」については黒住真の言及がある（『近世日本社会と儒教』ぺりかん社、二〇〇三年）。

(5) 横田冬彦編『身分的周縁と近世社会5　知識と学問をになう人々』吉川弘文館、二〇〇七年）。卜占・家相などの技術や知識への接触の様子は、横田「知識と学問をになう人々」（同書収録）。

(6) 当然ながらその逆も考える必要があるが、ひとまず本稿の課題対象からは措く。

(7) 井上智勝「近世の易占書―士君子の易・市民の易と疾病・祟り・米相場―」（笹原亮二編『口頭伝承と文字文化―文字の民俗学　声の歴史学―』思文閣出版、二〇〇九年）。また西洋近代を頂点とする学問状況のなかで、「合理性」の概念がいかに歴史化されていったかを宗教学の観点から整理したものに、藤原聖子「「呪術」と「合理性」再考―前世紀転換期における〈宗教・呪術・科学〉三文法の成立―」（『思想』九三四、二〇〇二年）がある。

(8) 同前、井上。

(9) 藤田幽谷に入門し、すぐ江戸に出て亀田鵬斎・太田錦城に儒を、岡田十松に剣術を学ぶ。天功について、豊田靖編『松岡先生年譜』また、高須芳次郎編『立原翠軒・豊田天功集(水戸学大系第四巻』(水戸学大系刊行会、一九四一年)。鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』(吉川弘文館、一九八七年)。『東京都多摩市高橋清賀子家文書目録・史料目録三七』「解題」(茨城県立歴史館、一九九五年)。

(10) 使用するのは、前掲注(6)、茨城県立歴史館所蔵の高橋清賀子家文書のうちである。この文書群からの史料については(高五―一)のように文中に示した。

(11) 益子勝「平澤随貞と松宮観山の易」『二松』一四、二〇〇〇年。同「新井白蛾の基礎的研究」(http://www.geocities.jp/masukomasaru/)。

(12) 前田勉『近世日本の儒学と兵学』第四章(ぺりかん社、一九九六年)。松宮は下野国足利郡板倉村の修験僧の家に生まれる。隋貞と同郷である。

(13) 菅野兼山(天和二年〜延享四年)は、佐藤直方の門人であり、享保八年に幕府助成をうけて江戸深川に建てられた「会葡堂」の創設者として有名。民間教育を目的とする郷校の先がけと評価される(大石学編『日本の時代史一六 享保改革と社会変容』五〇頁、吉川弘文館、二〇〇三年)。

(14) 宝暦七年初版。今回使用したのは萩市立図書館本、文化元年版。

(15) 宝暦二年題辞(平沢随貞)、宝暦六年版。東北大学附属図書館狩野文庫蔵。

(16) 黒住真前掲注(4)。儒教が江戸期を通じてもっていた思想内容の傾向として「生」「生々」を強調する側面があったという。こうした天地の「生意」は人倫にあって慈悲や憐れみといった、「ウエットでいかにも曖昧な生々の情緒に支配されている。」(三一頁)という。さらにこうした「生々」観・活物観は荻生徂徠にも継承され、その世界は神秘的、不可知の領域という様相を濃くする(三五三頁)が、天功の場合、世界は解するものとして残されている。

(17) 高橋家文書のなかには、天功のものと思われる、松永昌易『周易程朱伝義』(寛文四年・野田庄右衛門開板)があるが「周易程伝」や「周易本義」を占断の直接の根拠とはしていないようである。

(18) 随貞が問題にするのは易の理論よりも技術とその精度であったようである。「後人ノト筮其術拙フシテ応験不明、是ニヨツテ世儒専ラ空理ヲ崇テ術数ヲ鄙トシ一ニコレヲ陰陽家ニ委シテ省ル事ヲセズ」とか「卦ヲ得テ後其位品

ヲ察ル事専要ニシテ筮者ノ巧拙是ニヨツテ分ル」（ともに『卜筮経験』）とあるように、理論のみの世儒に批判が向けられる。

(19) 高田真治・後藤基巳訳『易経』（下）、岩波文庫より。なお同書から現代語訳をとると、「震雷が襲い来って危険が危険であるが、あらかじめよく周到に思案して貝（貨幣）などはほったらかし、九重の高い丘陵に登って身命を全うすることを考えるべきである。喪った貨財のことなどはしいて後追いをしなくても、七日もたてば自然に戻ってくる。」とある。

(20) 水戸学が「周易」「周禮」に重きを置いていた点（今井宇三郎「水戸学における儒教の受容 藤田幽谷・会沢正志斎を主として」『水戸学 日本思想大系53』）の影響もあろう。

(21) この節の内容については、主に水戸市史編さん委員会『水戸市史』中（三）一九七一年、吉田俊純『水戸学と明治維新』（吉川弘文館、二〇〇三年）による。

(22) 天保六年但馬出石藩（仙石家）の御家騒動に際し斉昭が「忠臣」神谷転を陰ながら激励したことによって「仙石浪人」を原因とする物騒な流言も市中にあったらしい。

(23) 大塩の乱後の情報の広がりは田畑勉「上州における〝大塩の乱〟情報の流布について」（『ぐんま史料研究』一三、一九九九年）が参考になる。

(24) 菊池謙二郎編『新定東湖全集』（復刻版 国書刊行会、一九九八年）所収。

(25) 古河藩家老鷹見泉石の日記には、大塩の老中宛書状とともに、水戸公宛の密書が江川の支配所で発見された旨がある。これをめぐり斉昭の命をうけた東湖は江川をたずねている（前掲『水戸市史』）。

(26) 茨城郡野口村（現常陸大宮市）の庄屋で紙問屋を営んだ家。関沢賢家文書として茨城県立歴史館に収蔵。

(27) 二度目の離職は「時勢を憂えて奇矯な言動があったために処罰を受けて」（『水戸市史』）とある。

(28) 前掲、『水戸市史』中（三）。

(29) 明夷の上卦は坤（☷）で自然現象としては地に配当する。同じく下卦は離（☲）で火が配当される。ゆえに、土が火を塞ぐイメージである。既済の卦は、初爻から上爻まで奇数爻には陽が、偶数爻には陰が当てられ、陰陽の配分としては完成形である。

(30) 前掲、井上論文では、大坂米相場の分析に、実際の廻米数とともに観天望気の占いが用いられ、先物取引と占いの関係を「近世人の独特の「合理性」」としている。天功の場合も現代人が感覚的に完全に合致できないが、そこに貫かれた「合理性」の存在を認めるべきであろう。

(31) 高橋清賀子家文書に稿本が、茨城県立歴史館の和書分類には嘉永元年に藤井某の筆写した別本がある。

(32) こうした顕彰活動自体は一九世紀に盛んに行われる機運と軌を一にするものであろう（羽賀祥二『史跡論―19世紀日本の地域社会と歴史意識』名古屋大学出版会、一九九八年など）。

(33) 足利氏の率いる北朝勢へついた佐竹氏へ対抗して、久慈・那珂・結城で戦った南朝方の在地武士集団の記録。南朝を正統するのは水戸学の基本姿勢である。

(34) 『水戸学　日本思想大系53』（岩波書店、一九七三年）所収。

(35) 田原嗣郎「会沢正志斎における天と天皇について」『日本歴史』四一六、一九八三年。

(36) 辻本雅史「国家主義的教育思想の源流－後期水戸学の国家意識と統合論」（『近世教育思想史の研究』思文閣、一九九〇年）初出は一九八八年。

(37) 大川真は、活物的人心観をもとに「民心統合」を説く会沢正志斎の後継に豊田天功の存在を指摘している（「後期水戸学における思想的転回―会沢正志斎の思想を中心に―」『日本思想史学』三九、二〇〇七年）。